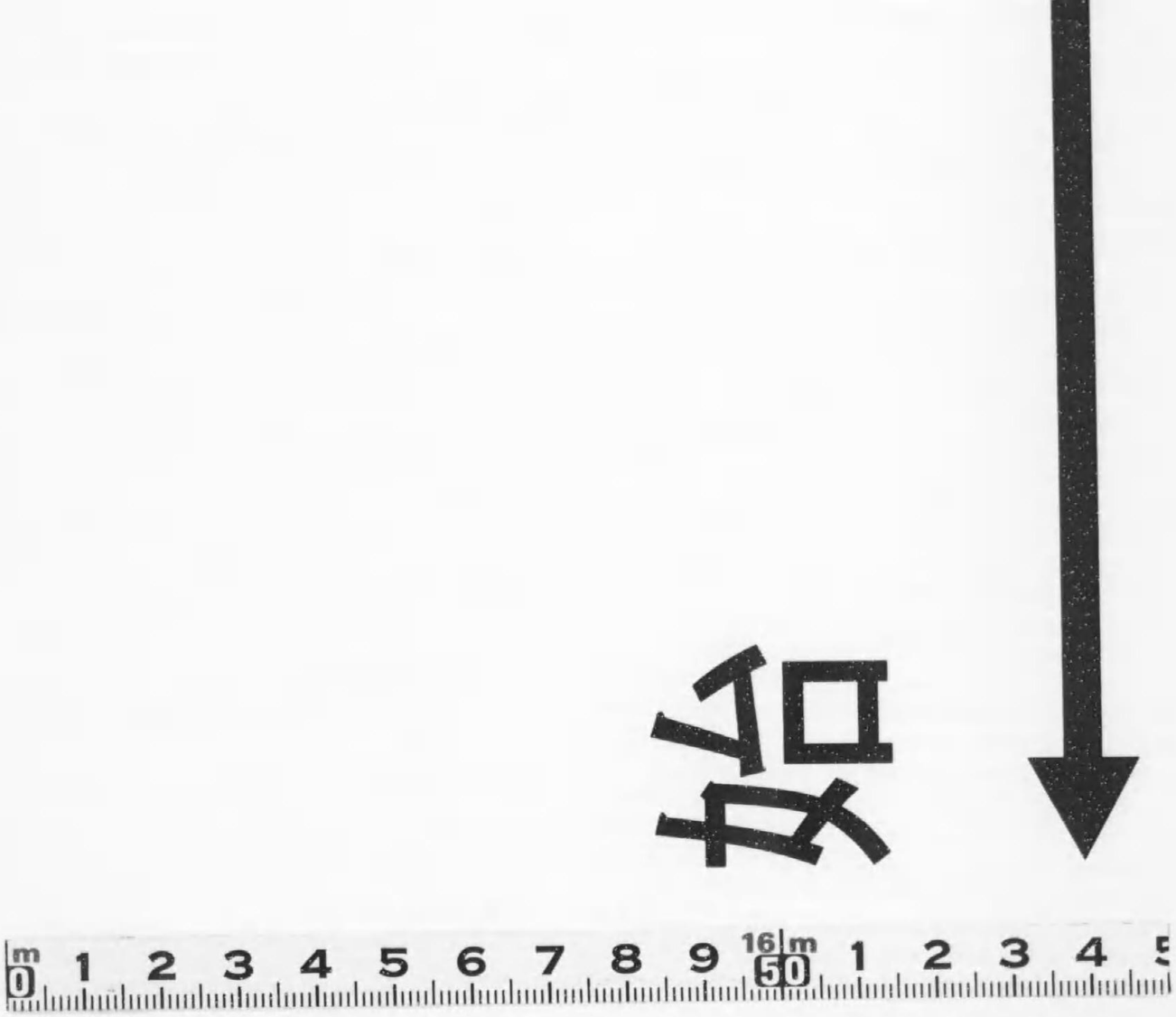


特116
55

圓筒入軸

特116
55

# 初卷

當願衆生百八惱煩無量重罪則時消滅我是誰未生以前本來面目一圓之中𑖌𑖽以大圓學佛子々以我伽藍則是壽養信心安居常在於其中敎行若座臥平等證知

日置流射形師弟子之起請秘記之事

三體從父母讓强剛成不在我力强弱成不在我耻唯剛弱不論如修學水鐵唫水々流鐵こふしのきを削此心を知て剛は剛弱は弱と巳々か分々に骨力を旨として嗜量を重師の恩敎を信して剛を不猜弱を譏す正直を爲神法度に任て心底に治する者には可有相傳深服の弟子成とも道に愚か成異法に驚無心深は不可傳者也起請如件

大正
14 6. 13
交内

足蹈の事

一目中に用口傳又は蜘蛛の尺と云心は蜘の家を作らんとて追風を請て向の木にと雲にも目を付て吹付らるゝ義也闇夜のかねと云も同し口傳也

弓搆の事

一目中に用墨指と云心は矢をはめて弓と矢と擧と三つの中程に目中をする也但遠近に替有主の骨法に依て弓の立所に口傳是あり

胴造之事

一目中に用日月身と云心は我は大日如來とおもふへし何處に恐る者もなき樣に心をゆるりと筋骨も延ひやかに如何にも慮外成射になし馬に乘眞の鞍の内の如し身形をけたかくゆくやかにして吉立ても居ても同心そ本より震搖矢藏にても又は船中にても用そ猶口傳灌頂の卷に有之也

引取の事

一目中に用口傳烏菟の梯と云心は烏はからす菟はうさき也弓擧を烏と云掛擧を菟と云故に矢を掛橋と名付けり左右直成を掛合とは云儀也矢筈上下に口傳有之也

歌に

打渡す烏菟の掛橋直なれと
引渡すには反橋そよき

弓に二度の反橋と云に直の反橋是也口傳萬々有之也

打起の事

一目中に用弦道と云心は時の手の裏に何れにても相應の掛

にて弦道を造るへし剛の弓懐掛の弦道と云て又爰に猿臂の射とて大事の重有也則日本記明淵往來と云書物に露也是は弓懐に口傳多是に附て弓懐弦道に樣々の口傳强有之熊灌頂の卷殘子細は弓誡學なれは不被成義也不被成事を爰に云ては誡弟僞と思故也

會の事

大事の口傳也　力　口傳大事也

一二　一文字　惠　休　善

二二　十文字　此十文字は惣體にも口傳有之誥の十文字共云儀也

離の事

一目中に用四部の離と云心は四所に有そ先條の五部の誥を一所を楔と必得て四を石火の如く出に離を四部離そ是は惣分の離そ又爰に

切拂別劵

此四つに口傳有之皆了簡の離そ鸚鵡と云は掛の離也此鸚鵡に四つの字の心を付て用事種々樣々口傳有之此次に未來身と云事有之扨社父母の收り未來身とて離の前と離ての後との骨法を能々心に知る事肝要なり口傳有是七道の七重とて大事の重そ大形は是を頂上共可心得儀也

骨相筋の事

一心と七道の五部の誥又は始中終の骨法射形に延て不縮を骨相筋と云ふ儀也矢束も爰にて知事也

引矢束ひかぬ矢塚に唯矢束

三つの矢束をよく口傳せよ

口傳せよ矢束と鞭と力皮
長きをは次短をきれ
右大事の口傳に有是也

手の裏の事

一心は五ケと云又吾加とも口傳大事也
一ニ　鵜の首浮たる也　定　惠善　の三指に口傳鸚鵡の離
口傳也
二一ニ　鸞中輕し　定と　神力の三指に口傳有是なり

剛弱の事

一心は惣體に用といへ共第一先擧と脈の間を專にす然れ共押過ては下へ弱後へ過ては弱前へ過ても弱上へすきても弱也前條吾加を能〻心得て四方弱みなき樣に修學可致至ては呼立たりに當る掛へ心を不通離を用そ强弱も口傳有之也

懸合の誥の事

一是は矢束に用義也口傳大事又楔と云體に定是は誥の楔也口傳離の楔と云は過て四方へ碎て散如し矢束の楔とは能程にしまるそ二ツ楔とは是也

弓之威矢之積の事

一心は弓と矢と相刻相生を知る事也弓と矢と相刻して不被掛合時の目中遠近に用そ口傳矢尻をかむと云本說有之灌頂卷に顯秘事也誠學の人は聞ても不可耳る也誠學に知事也

## 弓脈の事

一遠近を知る心は長短の息見越の金と云事目中の大事是も誠弟の人は合點難有修學至ては覺る事也誠學の人我不修して愚成をは失れ師の教を疑事是多し奥儀に神道を修す神道と云は日本の初る時神の約束也其支證は神道を請て行に地獄の如に煎上る湯に入ても又ほのをの中へ入ても不被苦事也禰宜御子の小女其外愚成者も受ぬれは以行智也日神月神云おし給ふ約束もおなし天地草木有性非性も約束の不違分は末世迄も疑事なけれ共人間の能々は皆相違して捨れたる故に心の不屈人次第々々に道に遠成修學とけすして眞中より草臥て不至也若干人の内に壹人も稽古修學達たる人あらは遠近の目中も矢早も秡矢も遠矢も心の儘に可成漢之漢白に二百歩の眞中小川を隔て双方より矢を離て眞中にて矢先と矢先射合て後漢之射矢先を漢白喰留て其矢にて漢之を殺して有そ楊由も是にもおとらす其外是程の名匠は多かりつる日本にては高野山弘法大師奥州へ御修行の時下總國野中にて虚空より聲して弘法々々と呼たりけり折節陰在離覺とて弓の上手通合て射て落す其外六十餘洲に上手の手聞多かりし是皆五道修學仕修之事也不可疑可秘々々

## 竪臥之二義の事

一竪は剛し遊弓に用也臥は眞の弓に叶此二ツの心を能々心得て稽古可有也紅紫の口傳と云事も有之也

## 目付の事

一雪の目付と云事有之口傳萬々也亦おんしやうやからは羅こに目しゆと云事有是は蚊の目毛に巣に掛て世を過る少

き虫有此虫を羅こ界の人の身へ放て見れは餘り大さに目しいて不見又爰に蝸角の民は鳳凰に目しゆと云も是も同し心や此心はけしの粒なり共其内に目中をする心そ口傳の中の是は奥儀そ他流に中り擧と是を云義なりと云々

## 矢束の事

一先條に三つの矢束とて爲住斗や眞實は一つならてはなきそ修學の位に知そ引かぬ矢束は長そ骨相筋道に附て引矢束は五部の誥に附そ短そ唯矢束は世間の事そ口傳能々可有如斯何ても目師の位稽古上にて能々究て吉

## 皮肉骨の事

一萬事用事也人の骨と力と弓と矢と皮の人には皮の事肉の人には肉の事骨の人には骨の事也右の重の能々口傳可有弓の位を收る處も同事就中皮肉の九勘と云事有之重の口傳也

## 始中終法度の事

一ニ　中の意趣は七道有之
二ニ　矢早は剛を專とす也
三ニ　通り心鐵の位也
四ニ　遠矢曲也クル身反橋と云義也口傳有之
五ニ　花形直に美射事也

布て初心の部に歸す能〻口傳可有世間に弓稽古の人師を賴教といへとも此法度を立て傳る人は稀也先世間に的を射れは手前の花形不叶手前の花形を射とすれは的に不中と見へたり當流には初手の足蹈より始て目中と教ての紅葉重に至迄少も中を殘事なく稽古して社自師賢學の位に

至間的を射共生物を射共其外の目中に會て社中も花形も同相調物なれ弓の情と云は中也不被中鐵壁を十重通ても用に不立遠射さしても不入者也弓の本地と云は中て矢早を本とす當世は遊興まてを稽古して本眞實の義は薄しさありとても相構て〳〵法度を破て不可相傳者也

## 占掛合の事

一弓能射人弓を爲師と云詞にて可知是は彼離覺か詞也萬事に强用と取分弓道に專一と云〻

## 五重十文字の事

一ニ　弓ト矢ト十文字
二ニ　手ノ裏ト弓ト十文字
三ニ　懸ノ大指ト弦ト十文字
四ニ　胴骨ト肩ト十文字
五ニ　胸筋ト矢ト十文字

右五重十文字と云て一大事の口傳也

## 七障

喜心ヲヤフル（キヨロコヒテ）　怒ンヲヤフル（トイカツテカ）　憂ンヲヤフル（ユシウレイテシ）　思イヲヤフル（シヲモウテヒ）
悲ヤウヲヤフル（ヒカナシミテ大チ）　恐ンヲヤフル（ケウヲソレテジ）　驚ヤウヲヤフル（キヤウヲトロキテ大チ）

右四卷書初卷終

大正十四年五月

體勇社

柴田勘十郎

# 第二卷 歌智射之卷

## 一段

能引て引な抱よ手もたすと
離を弓にしらせぬそ世き

能引て引なと云は過て無理に引なと云事也抱よとは人の物を預りたるやうに大事に掛て能取置たれ共乞時は安く返す樣にと云事也たもつとは收て返しかぬるをたもつとは云儀也則離を弓にも身にもしらせすと云て唯おのつから離たるは吉依之離とは云儀也

矢束程引て味へ心なく
弦にひかれな腕の力よ

矢束程引とは始の大事也口傳有之味へと云事は弦に引るなと云事にて知る也腕の身力も掛斗りにてなしに腕力を

添て引と云心也口傳も多之七道の内に大形有之也
身のたけに餘る矢束も不足も
有やなしやとあらそいなしそ
身の長に餘る不足の事奥儀に知る事也まつ能樣に射て如
何程も矢束を引せて矢をそたてゝ吉此三首の理を能々口
傳して輙奥儀を不可免者なり

二段

一ニ　いか程も剛さを好め押力
引に心の有とおもへよ
二ニ　打起引にしたかひこゝろせよ
弓に押るなおもへ剛弱
三ニ　弦煙龍田の山の紅葉はを
顔に散すな息のつまるに
四ニ　息相はさとりの道の中なれや
有無の二つは目中にそよる
五ニ　皮肉骨弓に有や人にあり
矢にも有なりよく口傳せよ

一いか程も剛を好めとは大三との心や弓を引と心得たるは
わろし押を大め引を三分一との事也他流に引分と云事を
當流には大三と云儀也
二打起引にしたかひ心せよ弓に押るなと云も大三の心又は
剛弱の心擧口の口傳多是能々教傳可有之と也
三弦烟とは歌の云掛なり息込と云事を辭故に如此樣々に口
傳有之委に灌頂の卷に露奥儀也
四息相は覺の道の中と云は有無の二つなり目中に依ての事
口傳有是
五皮肉骨と云事萬事用儀也一つ〳〵口傳すへし口傳により

たんれん有此五首輙不可免愚成人に傳れは弓に射ころふ
者也可惜々々强然惜にあらす前學を堅固にして後に可傳
と云事也

三　段

一　口傳せよ押ていたすらに引無益
父母の心をおもひやるへし
二　剛は父緊は母なり矢は子なり
片おもひして矢はそたつまし
三　打起引ぬ矢束を身にしらせ
胸より左右へ延て離れよ
一口傳せよ押ていたつら引無益片心なくとは骨にて引分よ
と云事也大三を意得して道を能々合點すへし骨を引と云
事口傳の中の口傳也
二剛は父緊は母なり矢は子なりと云事は右の重に同様なれ
共此歌の心は矢に聲を掛て聲と筋と肉とにて矢を送る事
知る可秘々々
三打起引かぬ矢束を身にしらせ胸より雙へ延る心は離の前
とおもふへし延て延てとおもふ心吉此三首重の大事也夢
々輕く不可傳我知たる能は澤山に思物なれ共扨社起請を
師より書て卒爾に可傳との事也此流は世に大切の儀也可
秘々

四　段

聲は唯弓によりける物なれは
きり聲も吉かけ聲も吉
切聲も懸聲も吉と云事は延て掛る聲は切くへにして吉聲
は五臓より出る物なれは若々聲に掛しろい離に當りてつ
かへは懸聲にすへし掛聲共後息共云て重々の大事也他流

にケ様の事を不被知也是は離をそたつる義也弓に聲樣々の口傳多し生德昔弓に聲と云事はなし式時百路掛をつくるとて時の調子を弓にて取事を政次と云人仕出てより次第々々に世に至て弓聲に取て用事なり則時の調子に掛子細有是と重の重也大事と意得て輙不被免殊更口傳も是多し猶灌頂之巻に露也

五段

一　口傳せよ矢束と鞭とちから皮
　　長きをは繼みしかきをきれ
二　出るとも入とも月をおもひなは
　　引弦道にまよふへきなり
三　押引と繼めなみせそふしの山
　　みねと胸とはひとつなりけり

四　青楓秋の木末そ冷しき
　　紅葉重に嵐ふくなり
五　朝嵐身にはしむなり松風は
　　目には見へと音は冷し

一口傳せよ矢束と鞭と力皮の歌大事是は引矢束の事そ主の好と所作に隨て切ても繼ても能物そ此重は至て自師の位にて定儀也我を射覺て極る法也可秘々々

二出る共入共月をと云心は手の裏を取てより正路にする也萬々也此歌の口傳は佛説にも過たる事そ秘して不住口傳の中の事なりと云々

三押引と繼めなみせそと云心は頂と胸と同し心にと云事そ中高と云もいほるると云も同し心そ口傳のやう萬々也

四青楓秋の木末そ冷しきと云心は先青楓は春夏也春夏は萬木色々に花咲美しけれ共秋の末には皆散果下には紅葉重

て木末をみれは嵐にふけてすさましけれ共下には紅葉重てあれは美敷事を仕懸て枯たる木の如き成る心也萬事の能に此心有書筆の道にも大磨之即之王義之日本にては高野山の弘法大師佐理行成鄕道風抔の筆道の秘事にも此紅葉重の心を弓道を取て書たる爰に秘建之文有能不仰也心五朝嵐松風の事能々仰に不及風體の心也不云いへ共此說一段深し深心としたる體と颯々としたる體との心有無の二つ也口傳の樣大事也餘り〳〵爲秘故に異名付て云也何れの儀にも名を替て秘して云事多是皆以方便の異名とて不驚心肝要也々々

弓稽古の人起請の端作

一高山に推車に口傳也

二玉竹の遊口傳也

三神爾口傳莫太也

此三ケ條を心底に合點して後に師弟の望あらは一つ〳〵可相傳有者也相構々々輙師弟の契諾不可有付道は道の達者より出る稽古は信より起る稽古より鍛練は出る鍛練より奇持は起る奇持より神變は出る神變より不思議は起る不思議より妙は起る此妙に色々口傳してかり初に不可有隨て名人の始に千里の行ひ道も一歩より始るとこ云說能々可聞收て釋迦大師も祖師も名匠も名人も生る時は別の所なし賤も貴も甲乙共に皆一つ也並て二つなし難生世に出人男を請て習學の道に不事行は口惜々々付紅紫の二字と云事諸事に難用と殊更弓道に用也紅紫と云は人の名に似たれ共此歌にて可知也

一入は薄くれないに生れきて
千入になれはむらさきの雲

朝夕に柴の庵にたつけむり
いつ紫の雲となかめん

此二首能々可聞稽古の心に様々の唫多是とみへけり道に爲入歌也能々知たる人に聞は佛道に近きそと云々

二卷の終

大正十四年五月

體勇社
柴田勘十郎

# 第三之卷

一萬事に中王と云事可心得也先四方を取て中王を加て五形と云五味共云義也五つの味也色も五つの色を合て黃の色也是中王也矢の五形も是に有掛合矢筈に口傳萬々也五方の事なりと云々

一三合三つと云一大事の口傳也

一ニ弓身意之三合能々口傳也

二ニ弦箭之三合口傳也

右六字の理を能々可有修學右の口傳心を思無邪の三字と名付て諸法に出せり口傳有之

一兩部と云事は日月也日月と心得ぬれは無果口傳そ先兩部とは二つの擧也胎金と云心也此二つの擧を合て一つにす

れは人の心に依てしゆみせんと如成山には樣々の物種有善惡の二つ爰にて可修學有是を日本の事に取て富士山と云り是歌智射の內に見へたり口傳無果事也云々

一五上七道は人間の大體也家に柱立也神道には正直也佛道には五戒と慈悲也以是を萬事に調事也離は會者定離そ口傳萬々有之也云々

一十上と云事は人間の思ひ出を極て榮花に募を云り是は弓の十段窮を取て十成と云を學ひて云付たる詞也弓の奧義に至るを十成共又は十上共云也何れも一つの云也弓より爲出云そ口傳の樣莫太也云々

一十段之位一つ缺てもせんなき事なれ共知人少し修學する人は稀成此十段と云は奧の十段也口傳大也云々

一二十五有と云事是は法度手の裏掛稽古の五重十二字との事也是を段々に能々からして學事云〻

一六道と云て弓に苦身有輪廻の弓難事行

一地獄とは苦敷弓を云儀也

二餓鬼とは强骨を弱く扱て力なき故に悲き弓を云儀也

三畜生とは矢束を無理に引たかり上手の事を急く似たかるを云儀也

四修羅とは無理に剛をあらせて位へ遠きを云儀也

五人道とは餘々緩々とのひ勝に斗り心得て是も位へ不被付を云儀也

六天道とは餘り美敷射る事斗を賴を云事也

右之六道に迷病は草菅勝穀にて可唸口傳也云々

一冷　熱　浮　中　沈　片　身分　無性　三病此十脈を能々分別可有凡日の下に人間の數千萬億那由佗恒河沙と云て無果事なれ共同面二つなしされは責て廿五有と今の十段を形取能々分別して木火土金水の五行に居て酢甘

苦辛鹹味に射させて社其主々の心に合然して奥儀に至て能射手なれ弓射の十段も位の十段も不辨漸五身七道繋剛弱矢束抔を指口に覺て射には三病五緩とて何れへも不片付也是を柳は緑花は紅佛祖不傳不立文字に片付事也七障六いんの口傳多是

一醫師評定の肝要に好物にやつれ嫌物養と云事口傳中肝要也

一眞實と云事有之正法をそたつる事なり正法と云は五上也弓の五味也是を直に養て賢覺に至れは實と成實と云は花の後に眞の成事也

一揚由か大木の矢と云も掛合五方に有是

一左斗退延の二字能々口傳可有退め指矢遠矢に吉延目的射通手前にも吉也と云々左斗とは剛弱の留り也口傳の樣莫太也云々



## 五輪碎と云事

一土體黃色中四角と云事は先足踏を如大地の踏て又中四角と云は胴骨肩の口ひすみなき樣にと云事也

二水體黑色北圓形とは水の器に隨ふ事くに弓の中へ眞丸に割込扨弱き所へ剛き筋骨を水の如流に引込扨離は露なとの落る如に眞丸にとつ〳〵と離事也と云々

三木體青色東圓形是は右の丸き大體を仕覺て扨春に至て草木の枝榮花如咲に拳形掛形顔持を直事成と云々

四火體赤色南三角是は右の花咲美敷事を仕懸て扨實の如成に弓をも三角に取五體をも相生に搆剛身をあらせて石火の如出に弦烟を立て離す口傳也と云々

五金體白色西半月是は又右の段々を仕懸て弓手も妻手も三ケ月形に先拈になし扨いかにも能刃金を能鍛て剛はしか

く晴て輕き刃金抔如打折に離す口傳也
右の五位を五輪碎と云て一大事也口傳莫太也と云々
一中神ヲ不修射ハ闇天ノ如飛礫
一奥義ヲ透タル藝ハ雪中ノ老馬ノ似知道
一骨法不行射ハ巻ゐ如驗少風
一利學ノ達タル者ハ向大礒似龍乘雲ニ
一射邪情藝ハ枝榮葉繁根淺如樹
一知惠厚藝枝葉薄根深似森林ニ
一巻射諸段ハ取耳似猪鼻
一深信持律弓人日月遊行和朝如出虎
一十能七藝ハ人間花弓馬能修透成實助身命
一自力射修ハ雨水無道如損穀
一習射法德露花有惠似增色
一無骨弓師似治猿猴疵
一鍛治教藝如作蜂巣
一利疎吟如梅枝鈍座厚似楠枝
一千兵安求自分射一將難求一張弓

トク〳〵ト落ル岩間ノ水ヨリモ
ハヤキ流レソミナトニハツク

此歌の心は鈍知老若氣の淺深に隨水を流すは義の上手下手の心を注也此本說は少蟻大堤を曳と云本意也と云々
一武田小笠原二流本とす隨分可修學左有とても此日置流には射手の肝要とて家風に不順事也依左有一切他流の筋を不承合儀也と云々
一水に四見の不同有と云事大事の口傳也此心は天瑠璃莫宅人水餽火口傳可有也
一夜受てしやくまくと有遠山の曉一聲の郭公雲外に聞本源を射透す一張の弓

一武士の射矢は誰そ郭公心を透す夜半の一聲

三卷終

大正十四年五月

體勇社

柴田勘十郎

## 懸母

父母大三の事

剛父

一心は引に推と引と兩方の氣味そ推大目引を三分一との事そ是に種々の口傳有之又此次第に五部の誥と云事有之五所の骨相肉身に口傳又此次に父母の收りと云も同事なれ共少心か替そ則比人雙の心そ此比人雙に色々に口傳有之父母大三より始て五部の誥父母の收比人雙此四つの心を能修學してこそ矢束はみへたれ爰に矢束の口傳有之奥儀に露事也

會の事

一右に一文字十文字と云事二つの掛を爲驗斗也

三弦搦の口傳弦道の能也
四淺深口傳人に依時々矢數に用也
五弦斗遠矢の口傳也
六腕力の事萬々口傳也
七一騎當千口傳莫太也
八大將　口傳
九剛無理　口傳

嫌好の事

心は惣體に難美と弱けれは嫌也
難賤と剛けれは好也難剛と不延縮むを嫌也難細と不縮延
を好事也
右醫師評定牛角の療に露口傳萬々也

手の裏の事

一是も右に鵜の首鸞中と云て二つの手裏を爲注斗なり
三三毒剛し上下開閉に口傳三德と云はとんよくしんいくち
の事也口傳可知也
四骨法陸也諸法に渡口傳也
五呼立たり弓の起請と是を云儀也走て二度乳子に成と云事
也從是始也矢の諸病此一つにて治る也其外奥儀に露事也
右重そ牛角の相應とて皆療法の部也重々に口傳可有義也
と云々

弦の收矢の別の事

一先條に呼立りと云手裏弦道弓の高尺所に鸚鵡の離にて何
心もなく初に離たるの弦の收りにて有そ是に口傳樣々多
し一大事と可秘々と也矢に別と云事は弦の收り時別に矢

に隨て遠速有能々口傳に有之此矢の別にと柏子云事有之
息相の柏子と云又はしつへいの柏子共云儀なり彌口傳是
多し也

相剋相生の事

一一二弱き弓に重箭
一二三少き弓に太弦
一三二餘力に細き矢の事
右此三ケ條を難注能々可有口傳者也

檜垣十文字の事

一目中に用心は立なる物には檜垣に弓を推當て吉横成物に
は十文字に弓を押當て吉以猶口傳多是也



三舉と云事

一是目中之大事重の重也寢々小法師と云儀也此心は乳子の
守する者子を寢さする心を唸なり口傳樣々有是は當流の
中物の一事可秘肝要也

意念の事　口傳

一防風雁金の骨に
二氣延矢に氣を付て見送口傳
三眼情目は五臟より生たる故に注口傳也
四金目扇に唸口傳是多し
五高越敵相に用口傳也

聲之位の事

一切聲　掛聲　皮肉　息相　後れ息と云て五つ有何も

大事の聲也弓に依て可懸口傳也歌知射部に大方有之灌頂
卷に委露也附時の調子の事

絹綾錦の三段の事

一修學自師の位に至は知事也口傳莫太也と云々

經の段の事

一心は萬事の堅貫の事也取分絹布に相應の竪の貫にて弓の
事に經の段と露吟事多是委は灌頂の卷に注也

十二字五意の位の事

一母父人しけれは子の成人急なり
二臣君直なれは國ゆたかなり
三弟師相生すれは諸學長高也
四石鐵相剋して火の出事急なり
五晴嵐老木紅葉散重なりて冷しゝ

右の五道口傳の樣一大事也と云々

離の事

一先條に　切　拂　別　劵と云て四つ字を爲注斗也
一切と云は切離也是は射通物に吉離也口傳
二拂と云は拂離也此心は遠矢に吉離也口傳
三別と云は別離也是は損矢に吉離也又手前にも吉口傳
四劵と云は堅離心也是は中物に用口傳也能々教傳可有之と
云々

五部の誥の事

陰　爰にて誥を剛の誥と云儀也

肩　爰にて誥をき肩の誥と云儀也

胸　爰にて誥を胸の誥と云儀也

肩　爰にて誥を右肩の誥と云也

陽　爰にて誥を腕力の誥と云也

右五部の誥と云儀也一大事の口傳也と云々

一剛の緩と云は推手の裏又は擧の緩也剛の誥にて可直口傳也

二繫の緩と云事妻手の緩也腕力の誥にて可直也

三肩の緩と云事左の肩の誥にて可直也

四右肩緩と云事右の肩口の緩也右肩の誥にて可直也

五胸の緩と云は胸にて緩を云也胸の誥にて可直也

右五緩と云儀也何れも五部の誥にて可直口傳也

四部の離と云事

一是も右の誥を眞中に水の心を持て五臟五體の情を胸に收て其色を合て見れは紫也此紫の胸の内へ大石を如打込に離の心を付て双四つの搦たる物か一度にさつと切て離心そ是を紫部の離とは至ての心也此心を覺ぬれは弓道心の儘に叫也

牛角の療と云事

一牛には角に勝たる物なし然共五體弱けれは見事成角は不入物也弓の療に射形も美敷見所は能樣なれ共五かくの療をも不辨射事を嫌也唫は牛の戰に角は見事なれ共其牛弱けれは負也角は弱けれ共其牛剛けれは勝也以爰を牛角の

療とは云儀也牛馬人間皆薬を用て病を癒すは醫者の骨也牛馬人間の大成五體に薬種一朱一毛の輕き以重を加減して病を如癒七道より初て諸勘を揃て弓の眞行草を仕立たる事皆以如薬種の薬傳の法は天笠より弓の療より始也其後薬師佛出生し給へて薬と云事を出來たれ其先は弓療の人の名を奇妙と云つるか薬師佛出來之より薬を以て病を癒す人のを醫師と云事も始る也弓の師は奇妙也薬師は醫者也日本に弓師を奇妙と云事を不扱故に奇妙の沙汰を醫師評定とは注したれ奇妙と醫師は其位尊事難注依是奇妙の人は我身を大日覺王と崇薬師の人は我身を薬師如來と崇とや次村上天皇の御代に吉備大臣歸朝して弓に八掛と云事を印たれ共餘言多けれは當流には略是を定て他流には可用哉返々弓の療は病人の薬種と可心得事肝要也可信々と云々

弓の文の事

一先條に　絹　綾　錦　又は經の段と驗たるは同樣にて利なり心は五體の筋の十王むくうに入違たるを我と自師に習て弱所へ剛筋を引張也弓に冷　熱　平　三張の弓皮肉骨の九勘に合て加減して賢覺に可收口傳多之心は風は威て長閑に成也深信とした心と颯々としたる體との心能々口傳可有裏表を知事肝要なりと云々

十八界と云事

一七道諸勘悉皆覺して一尺八寸に誥是は小間の口傳と云

剛々正直の事

一一大事の口傳そ大形此歌にて合點可有

千萬の其斷は剛弱に
直に射させん爲とおもへは
一一分三界と云目付の事口傳之樣萬々有當流の一大事の目
付也

當流奥儀位の究の事
一六四雀積一町三尺十段百手
弓緣之五德の事
年德位　習德位　見德位　身德位　意德位

四の卷終

大正十四年五月十五日印刷
大正十四年五月廿五日發行

（非賣品）

發行兼編輯者　京都市下京區御幸町通萬壽寺上ル須濱町六番戸　柴田勘十郎

發行所　京都市下京區御幸町通萬壽寺上ル須濱町六番戸　柴田勘十郎內　體勇社

印刷所　京都市三哲通大宮東入　三秀舍

284
435

終